

④まとめ

MWS 簡易版・訓練版・ホームワーク版の入力作業や簡易事務作業において安定した作業能力を発揮するとともに、疲労を感じつつも定期的に休憩をとることで、集中して作業ができる体験ができた。試行終了後に行った振り返りでは、「働く時間帯、日数に耐えられる体力ができていない（中略）持続的な体力をつけて、ジョブコーチがあるということがわかったので、サポートを受けてやってみようかなあ。」と感想を述べている。

（イ）事例 d

①事例の概要

37 歳の男性で、統合失調症と診断を受けている。病状や生活のリズムも安定している。週 3 日間、1 日 5 時間で作業所に通所している。

②職業ガイダンス受講状況

「認知機能障害」の講義を踏まえ、一般就労時に現れていた「頭が真っ白になってしまう」状態について理解が深まった。また、働くときには障害を開示し、「一人で頑張るのではなく最初の何ヶ月間かは一緒に職場にいるジョブコーチを使ってみたい」とのイメージができてきた。

③トータルパッケージ実施結果

（a）WCST

個別面接において、「（WCST で）始めに何もわからない時と何を入れても ×× と出たときに（『頭が真っ白に』）なった」とコメントしているとおおり、セッション 1 では保続性エラーが多く出ていたが、追加指示により 1/3 以下に減り、補完手段を用いたセッション 3 では消失した。また、追加指示や補完手段などにより、ルールの推測が進んだことで、セッションごとにカテゴリー達成数も増加した。この結果から作業開始時に指示理解が不十分になりやすいことや適切な補完手段の活用により作業遂行状態が改善することが推測された（表 3－1 2 参照）。

表 3－1 2 d さんの WCST 結果

セッション数	カテゴリー達成数	非保続性エラー	保続性エラー
1	1	20	17
2	4	12	5
3 ※	7	6	0

備考）＊補完手段として、カテゴリー名カード、ポインティングデバイスを使用

（b）MWS 簡易版

作業日報集計を行っているときに「頭が真っ白な」状態になり、指示内容を「重要メモ」に書き取り、作業を実施した。d さんは、検索修正において、「注意が散漫になってしまいミスにつながりやすくなる」という実感をコメントとして記した（表 3－1 3・表 3－1 4・表 3－1 5 参照）。

表 3-13 dさんの事務作業における平均正答率とエラー内容

課題名	数値チェック	物品請求書作成	作業日報集計	ラベル作成
実施の有無	○	○	△※	×
平均正答率(%)	91.7%	100%	100%	
エラー内容	過剰修正			

備考) *時間の都合によりレベル1・2のみを実施

表 3-14 dさんのOA作業における平均正答率とエラー内容

課題名	数値入力	文書入力	コピー＆ペースト	ファイル整理	検索修正
実施の有無	○	○	○	○	○
平均正答率(%)	100%	60.0%	75.0%	87.5%	60.0%
エラー内容		入力ミス、変換ミス	操作ミス、 貼り付けミス	分類ミス	入力ミス

表 3-15 dさんの実務作業における平均正答率とエラー内容

課題名	ピッキング	重さ計測	プラグタップ	ナプキン折り
実施の有無	×	○	○	×
平均正答率(%)		80.0%	100%	
エラー内容		指定範囲外の計測		

(c) MWS 訓練版

事務作業課題を安定した作業遂行状況でクリアした後、手指作業であるプラグタップ組立課題、パソコンでの数値入力課題を行った。これらにおいては、作業によって疲労の状態が異なることに気づき、疲労の状態によって休憩時の対処行動を変えることが疲労軽減に効果のあることを体感していた(表3-16・表3-17・表3-18参照)。

表 3-16 dさんの事務作業における平均正答率とエラー内容

課題名	数値チェック	物品請求書作成	作業日報集計	ラベル作成
実施の有無	○	○	×	○※
平均正答率(%)	100%	100%		85.7%
エラー内容				操作ミス

備考) *レベル1から3まで実施、レベル3-2実施後、「重要メモ」を用いて、作業上の留意点を整理

表 3-17 dさんのOA作業における平均正答率とエラー内容

課題名	数値入力	文書入力	コピー＆ペースト	ファイル整理	検索修正
実施の有無	○	×	×	×	×
平均正答率(%)	100%				
エラー内容					

表 3－18 d さんの実務作業における平均正答率とエラー内容

課題名	ピッキング	重さ計測	プラグタップ	ナプキン折り
実施の有無	×	×	○	×
平均正答率(%)			100%	
エラー内容				

ラベル作成課題は、指示書や取扱説明書によって学習したテプラの操作方法を踏まえ、課題の進捗に応じて新たな操作方法を学習する必要がある、自らの理解の具合をチェックしながら作業を進めることとした。d さんに対し、作業を進めながら自分自身が注意を払わなくてはならない操作方法について、「重要メモ」に記入するように指示をした。その上で、レベル 3－2 実施後、「テプラ操作の重要事項」というタイトルで「重要メモ」の整理・再作成をし、それに基づき、レベル 3－3 を行った。作業終了後 d さんは、「メモを作ることで頭が整理されて、迷うことが少なくなった。」と述べており、自らの理解の状況を整理することの重要性について再認識したように考えられた。

④まとめ

トータルパッケージ最終日の M-メモリーノートに「仕事の仕方として分からないことをメモに細かくとることが、一般就労だと時間の余裕もないと思っているが告知就労であれば重要メモの作成時間ももらえるだろうと気がついた。それとジョブコーチがいれば、メモを取る助けになるし、自分の働き方のペースをつかむ助けになってもらえるかも。」と記している。

このように、職業ガイダンスで得た就労支援についての情報を踏まえ、「トータルパッケージで補完方法習得」のきっかけをつかみ、「支援を受けながら習得した補完方法を活用する」という自らの就労イメージを作り上げることができたように思われる。

(ウ) 事例 e

①事例の概要

38 歳の男性で、統合失調症と診断を受けている。病状は安定しており、一般就労に向けた希望も持っている。週 3 日間、1 日 3 時間で作業所に通所している。

②職業ガイダンス受講状況

一般就労の希望は持っているが、就労に向けた具体的な取り組みを行えていない状況で、職業ガイダンスを受講し、就労支援施策、支援機関等についての情報や就職活動にあたって障害を開示する際に整理しておくことについて知ったのが役に立つだろうと考えている。

③トータルパッケージ実施結果

(a) WCST

セッション 1 では同質のミスを繰り返しており、指示を十分に把握できていないままに作業を行っ

ていることが推測された。また、セッション 2 においては、自らの推測するルールにもとづき試行する傾向も認められるものの徹底できないために、混乱してしまう状況が見られる。補完手段を用いることで、カテゴリー達成数が伸びており、確実な習熟が認められた。作業の実施に当たっては正確な作業遂行のための補完方法の確立と徹底が求められると考えられた（表 3－19 参照）。

表 3－19 e さんの WCST 結果

セッション数	カテゴリー達成数	非保続性エラー	保続性エラー
1	1	9	14
2	0	13	7
3 ※	5	13	2
4 ※	6	6	0
5 ※	7	2	0

備考）＊補完手段として、カテゴリー名カード、ポインティングデバイスを使用

(b) MWS 簡易版

OA 作業課題や実務作業課題においては、比較的スムーズで正確な作業遂行を示しているものの、事務作業課題特に簡易事務を想定した作業においては、確認行為が十分に行われていないためにミスが誘発されていた（表 3－20・表 3－21・表 3－22 参照）。

表 3－20 e さんの事務作業における平均正答率とエラー内容

課題名	数値チェック	物品請求書作成	作業日報集計	ラベル作成
実施の有無	○	○	×	○
平均正答率（％）	91.6%	66.7%		100%
エラー内容	見落とし	検索ミス		

表 3－21 e さんの OA 作業における平均正答率とエラー内容

課題名	数値入力	文書入力	コピー＆ペースト	ファイル整理	検索修正
実施の有無	○	○	○	○	○
平均正答率（％）	100%	100%	100%	91.7%	100%
エラー内容				分類ミス	

表 3－22 e さんの実務作業における平均正答率とエラー内容

課題名	ピッキング	重さ計測	プラグタップ	ナプキン折り
実施の有無	○	○	○	○
平均正答率（％）	100%	100%	100%	83.3%
エラー内容				折りのズレ

(c) MWS 訓練版

本人の希望に沿って、OA 作業を中心に実施した。MWS 簡易版においても指摘されていた確認行動の不十分さが表出し、エラーレスの作業とはならなかった。セルフチェックモードを用いるなど確認行動を意識化することでミスが生じなくなった（表 3－23・表 3－24 参照）。

表 3－2 3 eさんの事務作業における平均正答率とエラー内容

課題名	数値チェック	物品請求書作成	作業日報集計	ラベル作成
実施の有無	○	×	×	×
平均正答率(%)	98.3%			
エラー内容	見落とし			

表 3－2 4 eさんのOA作業における平均正答率とエラー内容

課題名	数値入力	文書入力	コピー＆ペースト	ファイル整理	検索修正
実施の有無	○	○※ ¹	×	×	○※ ²
平均正答率(%)	99.5%	92.1%			89.5%
エラー内容	入力ミス	入力ミス、 半・全角ミス			入力ミス、 入力忘れ

備考) ※1：レベル3 トレーニング期にセルフチェックモードを使用

※2：レベル4 トレーニング期にセルフチェックモードを使用

④まとめ

トータルパッケージ最終日の個別面接においては、パソコンの作業を継続して行うこと、課題の選択がOA作業中心であったため「他の作業での（中略）能力がどれくらいあるにかつていうのをちょっと自分で知りたい」、OA作業で気づき慣れてきた確認行動を事務で生かせるかどうかを見極めたいとの希望が示された。

その後、これらの希望の具体的な進展として、週に1日施設でOAワークを引き続き行うとともに、職業適性を知るために地域障害者職業センターの利用を始めている。

(5) 試行の結果

(ア) 対象者の認識と行動の変化

①障害認識の広がりに向けた促しと対処行動の体験

職業ガイダンスにおいて、自らの疾病を病名や服薬状態としてではなく、「生活障害」として、すなわち、生活や仕事をする上での差しさわりや作業遂行上の不具合として捉えなおし、具体的な対処行動に繋げることや「認知機能障害」として捉えなおすことで、障害を補完する方法の習得への意識付けを図った。このような障害認識の変化への促しを行った上で、トータルパッケージを集中的に実施し、作業遂行上の不具合やストレス・疲労に対する具体的な補完方法や対処行動を体験することで、自らの障害を特性や行動特徴として受け止めるきっかけにつながったと判断される。

②自分に合った働き方についてのイメージの形成

職業ガイダンスにおける就労支援施策、障害を踏まえた働き方等についての講義、職場適応訓練実施事業所での見学等で得た情報を踏まえ、これまで障害を開示した就労経験を持っていない対象者から、「開示した場合には、企業と自分とジョブコーチでいい形で新しい働き方ができる。」「（見学先で

は) 体調・症状に合わせて一日 2・3 時間で週 2 日でもいいよと話していた。低いランクからやれるのは、障害がある者にとってはいい。」「自分にとっては開示が合っているのかなと思った。考えが変わった。昔は無理をしていた。」といった発言が出ている。このような情報に基づいたイメージの形成だけでなく、事例 d では補完方法を用いた作業を体験することで、より具体的で実感の伴ったイメージの形成につなげている。就労支援を受け、障害を開示して自分に合った働き方をすることを具体的なイメージとして捉え、一般就労を考える際に検討可能な選択肢を増やすことができるようになったといえる。

③ トータルパッケージによる認識の変化と行動の変化

(a) WCST

WCST においては補完手段の利用が組み込まれているため、対象者は補完手段を利用することで作業遂行状況が改善される体験をすることになり、その後の MWS での補完方法の確立に向けた支援の布石として位置づけられる。

(b) M-メモリーノートを活用

トータルパッケージの集中実施に当たって、各課題の終了時や一日の終わりに作業を行っての感想、作業を行って気づいたことや自らの状況などを M-メモリーノートに記述してもらった。自分の作業振りが疲れ、行動とその変化などを文字に表し見返すことで、自らの作業状況や行動に対する振り返りが深まったように考えられる。また、作業上の留意事項を M-メモリーノートの「重要メモ」に記して作業を行い補完方法としての活用も図った。

(c) MSFAS

日常生活で取り上げられることの少ない「疲労やストレス」について、「初めて言葉で自分の状態を考えた、と感じた。」という感想を述べた対象者もあり、自分自身で考えて文字にすることの有効性が示唆された。

(d) MWS 簡易版

職業ガイダンスにおいて MWS 簡易版を実施することで、それぞれの対象者の作業への志向性や作業遂行上の特徴を把握することができ、また、対象者にとっては様々な具体的な作業を行うことで自分自身の状況や作業遂行上の特徴を体感することができた。これは、MWS 簡易版がアセスメントとして機能したと理解できる。

(e) MWS 訓練版

【正確性と安定性の重視】

作業遂行に当たってスピードを重視した傾向を示すことの多い対象者にあっても、正確な作業遂行に向けたフィードバックを繰り返すことで、トータルパッケージ最終日の感想として、「スピードではなく、正確に安定的に働くことが大事だということがわかった。」と M-メモリーノートに記しており、作業遂行上の枠組みの変化として捉えられる。

【疲労のモニタリングと休憩の取り方】

MWS 訓練版においては、作業遂行にミスが表われる原因として疲労を重視している。そのため、作業にミスが表れた場合に、体調や疲労の自覚を促すきっかけとして、「疲れていませんか。」「気分はどうですか。」と声掛けを行っている。その上で「休憩シート」を用いて、選択的あるいは計画的な休憩を取るよう支援した。このような試みを通じて、事例 a では作業時間が 1 時間を超えると自発的に 15 分程度の休憩を挟むというペースを守り、安定した作業遂行ができるようになり、疲労と休憩との新たな関係を体感することができたように思われる。

【自立的な作業遂行】

前述した疲労度のモニタリングをもとに作業時間に対して一定の休憩を組み合わせて、安定した作業遂行が可能になった者においては、一定時間内の作業量や作業の出来具合に応じた試行数の調整など自らの作業能力に応じた作業計画を立て、実施できた対象者もいる。

（イ）施設スタッフの認識の変化

今回の試行は、今後、就労支援に積極的に取り組もうと考えている施設スタッフにとって、就労支援のプログラムを実際に見聞する機会になった。そこで得られたスタッフの認識の変化について以下にまとめる。

①障害認識の多様化

職業ガイダンスでの講義や MWS における作業状況を踏まえ、従来、「疾病」として捉えていた「障害」を「生活障害」あるいは「機能障害」として捉えなおすことで、対象者の日常的な行動や作業能力を見直すきっかけとなっており、「視野の広がり」として受け止められている。

②就労支援及び職業についての知識習得の必要性

就労支援制度や就労支援の方法、職業意識等に関する基礎的な知識を得ることで、具体的な就労支援で求められる知識と方法の習得の必要性を意識してきている。

③就労支援における障害認識・自己理解促進の重要性

障害認識や職業についての講義やトータルパッケージの体験を踏まえて、対象者自身が自己理解を深め、障害認識を変えていく姿を見ることで、「本人が自分のことを知っていく、自分の特性をつかんでいくというのが重要なのだ。」と感じ、「様々な情報と体験がセットになることで、実際とすりあわせられ、自分に合った働き方の選択が現実的になっていくことが予測された。」と現実的な職業意識の醸成に向けた取り組みとして、この試行を受け止めている。

④アセスメントと情報の共有の意義

今回の試行について「現状を明らかにして今後に生かす、今後に生かすために具体的方法をお互いに考えるという姿勢が一貫していた。」と受けとめ、MSFAS や MWS を用いて現状と課題を明らかにし、その後に向けた具体的な方法の検討を利用者とともに行うことができると考え、それに伴うアセスメントの技能とそれに基づいた指導力の必要性についても言及している。

⑤セルフマネジメントの習得に向けた取り組み

対象者のトータルパッケージを通じての障害認識や自己理解の変化と補完方法の習得・確立に向けた支援について、「自分自身の特性を知り、マネージメントしていくことが、安定して作業を遂行することにつながっていくということが参加者の様子から見てとれた。これまで、働きたいという思いが強く頑張り過ぎてつぶれてしまったり、苦手な作業が入り作業所を辞めたりといった方などもいたが、セルフマネジメントができるようになれば、自分のペースで働けたり、失敗体験として残るだけではなく、次に活かしていくようなことができるのではないかと思います。」と述べており、セルフマネジメントの習得に向けた取り組みが福祉施設で求められている多様な支援に結びつく可能性を示している。

(6) まとめ

今回の試行を踏まえ、福祉施設における就労支援においてトータルパッケージが果たす役割とその課題について考察する。

(ア) 就労支援を展開するにあたっての役割

①就労支援におけるコアツールとしての役割

従来から示されているトータルパッケージの機能として、作業遂行能力等についてのアセスメント機能と作業遂行力及びセルフマネジメント能力についてのトレーニング機能が挙げられる。今回の試行においても、対象者自身が自らの作業特性を把握し、作業遂行状況に応じた補完方法や対処行動を取り入れ、作業遂行力の向上のためのトレーニングを行い、その変化を体感できた。また、スタッフは、トータルパッケージを行う対象者の状況とその変化から日常的な言動や作業状況を見直す視点を把握したと考えられる。

施設で行われている種々の作業経験だけでは捉えにくい個別の作業特性や課題とその対策について、トータルパッケージを用いることで、利用者とスタッフが共有しやすい情報を導き出せる。また、このように施設で就労支援を行うにあたってのアセスメントとトレーニングの基本ツールとして用いることで、スタッフにとっては、就労支援に求められるアセスメント及びトレーニングの視点とそれに基づく支援技法の習得につながると考えられる。

②施設における作業指導や生活支援への還元

作業所や授産施設で行われている作業においても、個人の能力を生かして展開することが求められているが、様々な理由から困難な状況になっていると思われる。トータルパッケージで展開されている作業遂行状況の分析や補完方法の確立、セルフマネジメント可能な環境設定といった視点などを実際の作業場面に援用することで利用者の能力の向上に結びつくように考えられる。

また、生活上の健康管理や不適応行動への対応など生活上の課題についての支援においてもメモリーノートや MSFAS を用いることで、利用者及びスタッフ間の情報の共有を踏まえた支援を可能にすると

考えられる。生活支援においてもこれらのツールが使われることで、利用者自身の使いこなせる対処方法として位置づけることが可能になると考えられる。

③就労支援機関とのスムーズな連携を促進する役割

福祉施設のスタッフがトータルパッケージを用いることは、就労支援に必要となる視点も併せ持つことにつながる。このことにより福祉領域と就労支援領域が重なり、利用者の就労に向けたニーズはより詳細に捉えられ、課題についても生活レベルから就労レベルへと見通すことが可能になる。すなわち、福祉領域から就労支援領域への利用者のスムーズな移行を可能にする具体的な役割分担が双方から提示できる可能性を示していると考ええる。

具体的には、同じツールを用いて共有された視点に基づくニーズや課題のアセスメントはズレが生じにくいことや補完方法の習得やセルフマネジメントに関するトレーニングについても一貫性を維持することが可能になると考えられる。

（イ）役割を機能させるに当たっての課題

①技法獲得のための研修の必要性

トータルパッケージは使う側の状況に応じた多様な使い方ができるツールであり、それだけに使用する支援者がどのような目的で、どのような効果を念頭に置き、どのような使用をするかによってその意味付けは大きく変わりうる。

施設のニーズに合った使用方法をするためには、その基本的な使用方法について学習する機会が必要であり、就労支援領域と福祉領域の連携を可能にするトータルパッケージの展開のためには必須の条件だと考えられる。今後、どのような研修体制が組まれることが望ましいのかを検討する必要があるだろう。

②就労支援における位置づけの明確化

トータルパッケージは使う側の裁量に応じた使用が可能だけに、施設の持つニーズに合致した使用方法をどのように見出し、施設の就労支援に対する方針のもとで、スタッフ間のコンセンサスを作りながら具体的な支援方法として組み込んでいくのかは難しい課題になるといえる。

《参考文献》

刎田文記他（2005）．精神障害者に対するトータルパッケージの活用「第13回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集」pp.204-20

佐藤修子他（2005）．精神障害者社会復帰施設での就労支援におけるトータルパッケージの活用と展望 第13回職業リハビリテーション研究発表会発表論文, pp.206-207

障害者職業総合センター（2003）．調査研究報告書 No.55 多様な発達障害を有する者への職場適応及び就業支援技法に関する研究

障害者職業総合センター（2004）．調査研究報告書 No.57 精神障害者を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（最終報告書）